

特集

本当は知らない韓国

❖ キムチ、儀礼、ハングル、昔話

近くて遠い国「韓国」の本当の姿

❖ 石坂健治／金両基／宋実成／野間秀樹

姜連淑／榎本香織／谷晃／藤石貴代／林浩治

國文學²

日本語・日本文学・日本文化

二〇〇九年 第五四卷一號

解釈と教材の研究



國文學
目次

特集

本当は知らない韓国

「韓国語」と「朝鮮語」

——両者を区別することの妥当性について考える

宋 実成
6

韓国の食文化——キムチの歴史

姜 連淑
18

ナム・ジュン・パイクと韓国巫俗儀礼
——亡きボイスに捧げた作品から

榎本香織
26

韓国の昔話

金 両基
34

ハングル——正音エクリチュール革命

野間秀樹
46

韓国の茶文化

谷 晃
56

喪失と省察——現代文学点描

藤石貴代
66

アリランに託された歴史―特攻と革命―

山内文登 74

韓国映画史の怪物・金綺泳キム・ギヨンルネッサンス

石坂健治 86

―カンヌから東京へ―

「在日朝鮮人文学」の変容とは何か

林 浩治 96

連載

同時通訳者が編む

難訳日英辞典

松本道弘 106

鬼の思想 その周辺

綱澤満昭 132

心意伝承―遊働世界に生きる―

本莊雅一 140

異郷遊歴―古典文学の異空間 第二十二回「風」

前田速夫 122

逍遙・文学誌212「世紀」

紅野敏郎 160

ブックエンド311

栗坪良樹 164

映画の森

高橋諭治

167

演劇回廊301

大笹吉雄

166

學燈社からのお知らせ

168

表紙デザイン……………緒方修一

表紙イラスト……………清水 沙

特集…本当は知らない韓国

ハングル——正音エクリチュール革命

野間秀樹
(のま・ひでき)

文字が世界史の中に現れるとき

世界に言語は数千を数える。これに対して、文字の種類ははるかに限られている。世界でよく知られている文字は、いかに世界史の中に登場したであろう。あるいは石に刻まれ、あるいは牛や鹿など動物の骨や亀の甲羅に刻まれて現れた。地中海にせよ、中国中原にせよ、古く、文字とは刻まれて歴史に姿を現すものであった。

朝鮮半島に生まれたハングルという文字は、刻まれただけではなかった。版木に彫られ、紙に刷られ、さらに製本された書物という形態で現れた。この書物は『訓民正音』（くんみんせいおん／フンミンジョンウム）と題する。この『訓民正音』は、まさにハングルという文字が誰のために何故に作られ、いかなるシステムからなり、いかなる構造を有し、いかに用いるかということが書かれた書物であった。ハングルは〈文字自らが文字自らを語る書物〉として世界史の中に現れ

たのである。朝鮮王朝（一三九二—一九一〇）の第四代の王、世宗の治世、一四四六年のことであった。漢字やヒエログリフ、アルファベットなどと比べると、十五世紀と時代が下る

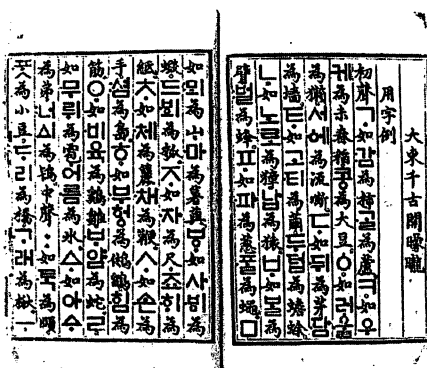


図1 『訓民正音』解例本

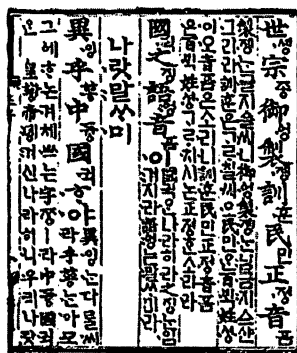


図2 「訓民正音」諺解本

とはいえ、こうした点で、ハングルはその登場のありようが既に、世界文字史上、稀有な存在であると言わねばならない。

『訓民正音』、『正音』そして「ハングル」

『訓民正音』とは「民を訓^{おし}える正しい音」の意とされる。この「訓民正音」は書物の名であると同時に、新たに登場した文字システムの名でもあった。略して「正音」とも呼ばれる。世宗自らも、文字を指して「訓民正音」や「正音」の呼称を用いている。

「ハングル」という名称は近代に入ってから、先駆的な国語学者であった周時経（チュ・シギョン一八七六—一九一四）が命名したものとされている。「ハングル」の名称は、とりわけ第二次大戦後に広く用いられるようになった。この文字

については一方で「諺文」（おんもん／オンムン）の呼称も伝統的に用いられていた。漢字に対する卑称であるという意識から、「諺文」の呼称は近代以降、避けられるようになっていく。

なお、「ハングル」は言語名ではなく、文字の名称である。日本ではとりわけNHKのテレビとラジオの「ハングル講座」が一九八四年に始まって以来、言語名としての誤用が急速に広まっていった。韓国語の入門書に『ハングル入門』などと用いられるのは一般的で、『ハングル会話』などという本まで現れることとなった。これは「ひらがな会話」と言っているようなものである。言語名のほうは、日本では学術的な呼称として「朝鮮語」が用いられることが多い。一般には「韓国語」と「朝鮮語」のいずれも用いられている。大韓民国では「韓国語」といい、朝鮮民主主義人民共和国では「朝鮮語」と呼んでいる。

正音前史

——〈話されたことば〉と〈書かれたことば〉

新たな文字である正音が生まれる以前にも、朝鮮半島では中国語とは全く異なった言語である朝鮮語が用いられていた。朝鮮語が中国語と言語の構造が似ていれば、漢字を用いた朝鮮語の全面的な表記も比較的容易であつたろうが、朝鮮語はむしろ日本語に構造がよく似た言語である。そうした朝

鮮語を全面的に表記するすべはなかった。ただし日本の万葉仮名に似た「郷札」(きょうさつ/ヒャンチャル)という漢字を用いた方法、あるいは漢文を朝鮮語で読むために送り仮名のように付した「口訣」(こうけつ/クギョル)という方法が存在したことは知られている。しかしこれらとて朝鮮語の全面的な表記には至っていない。郷札で書かれたもので現存するのは、「郷歌」(きょうか/ヒャンガ)と呼ばれる新羅時代の歌謡二十五首のみである。口訣は漢字や漢字の略体を用いたもので、日本のカタカナとの類似が指摘されており、日本の漢文訓読と照らし合わせてみても、面白い資料を提供している。口訣研究は近年、研究が進展している分野である。

日本の『万葉集』には四千五百首の歌が残っているのに対し、郷歌はわずか二十五首に過ぎない。こうした数値に象徴的に現われているように、古い朝鮮語の記録が極めて少ないことに規定されて、日本語と朝鮮語は構造的によく似ていても、言語学的には互いの系統を明らかにできず、言語学上は日本語も朝鮮語も系統不明の言語とされている。

さて一般に言語というものが実現するとき、音声言語として実現する〈話されたことば〉と、文字言語として実現する〈書かれたことば〉という二つの実現形態がありうる。地球上に数千あると言われる様々な言語が実践される中で、圧倒的多数の言語は〈話されたことば〉としての実現に終始し、限られた言語のみが、〈書かれたことば〉としての実現を見る。数千ある言語に対して、文字は数百種だと言われる。ラ

テン文字、つまりローマ字のように複数の言語を書き表すのに用いられる文字があっても、やはり〈書かれたことば〉としての恩恵に浴する言語は、圧倒的少数である。

〈話されたことば〉と〈書かれたことば〉という、言語の二つの実現形態から見ると、朝鮮半島における正音前史の言語の実現の様相は、〈話されたことば〉としては朝鮮語、〈書かれたことば〉としては漢文、即ち古典中国語という二重構造であった。話すときは、誰もが朝鮮語を用いながら、書くときは、漢字漢文を用いるという言語生活だったのである。二重の言語生活といっても、〈書く〉という営みは、基本的には支配階級を中心に行われてきたものである。朝鮮半島の〈書くこと〉、〈書かれたもの〉、即ち〈エクリチュール〉は漢字漢文によって成り立っていたのであった。郷札や口訣という僅かな部分を除いて、記録という記録は、漢字漢文であったし、学問といえば漢字漢文であった。要するに、〈文字〉とは漢字のことであり、〈文〉とは漢文と同義であり、それ以外はおおよそ想像すらしてはならないもの、ありえないものであった。朝鮮半島の〈知〉の根本は、漢字漢文のエクリチュールから成り立っていたのである。

正音の登場——二十八字という無限

正音は一四四三年に作られ、一四四六年に公にされた。世宗が、王朝きつての学者たちの集う集賢殿という機関を率い

て作ったのであった。集賢殿はいわば王朝の〈知〉の殿堂でもあった。言うまでもなく、その〈知〉は伝統的な漢字漢文エクリチュールに骨の髄まで支えられていた。

こうした漢字漢文エクリチュールの中核から正音は誕生した。王、世宗の思想がこれを可能にしたのである。『訓民正音』の「解例本」と呼ばれる書物の冒頭に、「國之語音、異乎中國、與文字不相流通、故愚民、有所欲言、而終不得伸其情者多矣。予為此憫然、新制二十八字、欲使人人易習、便於日用耳」(我が国の語音は、中国とは異なり、漢字、漢文と相通じることがない。故に愚かなる民は、言わんと欲するところがあっても、終にその情を述べることが叶わぬ者が多い。予はこれを憐れに思い、新たに二十八の文字を制す。人々が習いやすく、日用に便たらしめんと欲するのみである)とある。

「愚かなる民」とは文字を知らぬ民、漢字を知らぬ民の謂である。文字を知らぬ民のために二十八字を作るとは、即ち、朝鮮半島に生きて死んでゆく民の誰もが、その情を述べ、それを可能にしたいとの、世宗の宣言に他ならない。

何故に二十八字であるのか。文字とは、即ち漢字とは数千字を数えるものであった。例えば、朝鮮半島において漢字漢文を習う子供の多くは、その名も『千字文』から入った。一千の漢字が、「天地玄黄、宇宙洪荒、日月盈昃、辰宿列張」から始まる四文字ずつ、二百五十の句に編まれた漢字漢文の入門書である。この『千字文』を終えたのちに、『論語』な

ど様々な書物へと進むわけである。数千字の形、音、義を習い覚えるという教育を経なければ、文字も文を我がものとすることはできない。エクリチュールの世界からは隔絶されるのである。例えば日本語母語話者、非母語話者を問わず、現代の国語教育、日本語教育における大きな障壁が、この漢字学習であることを思えばいい。小学校六年間で学ぶ教育漢字一〇〇六字、常用漢字ともなると、一九百四十五字である。

それとても、これらは日本語としての漢字の用法だけであって、漢文ではない。十五世紀の朝鮮語の世界では、漢字のみならず、話したことなどない漢文も、その語彙と文法を学ばねばならなかった。今のように書物とメディア、教育が行き届いている時代でもない。そうした時代に数千字に及ぶ学習でのみ到達しうる世界、それが漢字漢文エクリチュールの世界であった。これに対して、わずか二十八字を学ぶことによって、新たなエクリチュールを獲得しうるシステム、それが正音である。人々が日常の中で語っている朝鮮語を、初めて、そして誰もが容易に、〈書く〉ことができるようになる。二十八字を学ぶことによって、〈話されたことば〉しか持ち得なかった民が、〈書かれたことば〉を獲得する。〈正音エクリチュール〉の誕生である。

同時にそれは、正音を用いて漢字漢文エクリチュールをも学ぶ道を切り開く。例えば、正音以前は漢字しか書かれていなかった『千字文』に対して、正音以後には、漢字のそれぞれについて、朝鮮語の意味と漢字の字音の双方を正音で示し

た『千字文』が現れる。日本語でいえば、漢字に対して「天、あめ、テン」「地、つち、チ」「日、ひ、ジツ」「月、つき、ゲツ」などと、漢字と仮名を併記して書くことができるようになったようなものである。こういった書物があれば、漢字もどれほど習いやすくなるであろう。世宗が臣下に、まづ正音を習わしめ、しかる後に漢字を、といった指示をした記録も残っている。



図3 「光州千字文」一五七五年

わずか二十八文字によって、無限ともいうべき朝鮮語のありとあらゆる表現を文字に書く。〈二十八文字の無限〉、正音二十八字の制定はエクリチュールのありかたを根底から変革

するものであった。漢字漢文エクリチュールしかなかった世界に、正音エクリチュールという新たなエクリチュールが重なる形で胎動する、〈正音エクリチュール革命〉の始まりである。

正音のシステム——音が形になるとき

それでは〈二十八字からなる無限〉、正音とはいったいかなるシステムであったのであろうか。このことを見るには、改めて音と文字を明確に区別してかからねばならない。

言語音を表記するには、様々な方法がありうる。用いる文字もいろいろなものがありうる。日本語はひらがな、かたかな、漢字、ローマ字などの表記が広く用いられている。もちろんハングルでも表記できるし、ロシア語などの表記に広く用いられているキリル文字でも、アラビア文字でも可能である。どの文字でいかに表記するかによって、正確さや効率が変わってくるだけである。朝鮮語も同様である。

正音を作った人々は、朝鮮語を全面的に漢字で表記しようとはしなかった。既に見たように、漢字は「易しく習う」ようなものではなかったし、何よりも中国語と異なる音の構造を有する朝鮮語を表記するには、はなはだ都合が悪かった。学者たちは朝鮮語の音がいかなるものであるかをつぶさに観察、研究した。そして現代の言語学が〈音素〉(phoneme)と呼ぶ言語音の単位にまで限りなく近づいてゆくのである。

音素とは、単語の意味を区別する最小の音の単位を言う。日本語で言えば、/a/、/i/、/u/などの母音も、ヤ行を作る/y/や、ワ行を作る/w/といった半母音、/p/、/t/、/k/……といった子音、そしてはねる音/N/等々の子音も音素である。これら音素の組合せで、/sa/、/ku/、/ra/などといった音節が構成され、さらにその音節を組み合わせて/sakura/などといった単語を作り上げるわけである。言語はこのようにわずかな数の音素の組合せで多くの音節を作り、さらにその音節の組合せで無限に近い単語を作り出すことができる。集賢殿の学者たちは十五世紀朝鮮語の言語音を分析し、こうした母音、子音の組合せで音節を、そして単語を書き表しうることに到達するのである。

正音では、母音字母を・(天)、一(地)、一(人)の三つの字母の組合せで作らした。例えば一と・の組合せでトを作る、といった具合に。トは現在/a/と発音される。そして子音字母は、何と人の発音器官の形から(象形)した、つまり象ったのである。例えば/k/の字母はまさに/k/という音を発音するときの奥舌の形から象った。現代言語学では/k/は奥舌が口の天井の奥、軟口蓋と呼ばれる部位に接する音であるので、軟口蓋音と分類している。正音では軟口蓋音/k/は舌が軟口蓋に接する形から「と」定めた。/n/には舌が歯茎と歯の裏に接する形から「ㄴ」という形が与えられた。/m/は唇と閉じて作られる唇音であるが、これは唇の形口である。前歯と舌の間の摩擦で作られる音/s/は前歯の形入を採る。——そう、

正音の字母には音の形が棲んでいる。

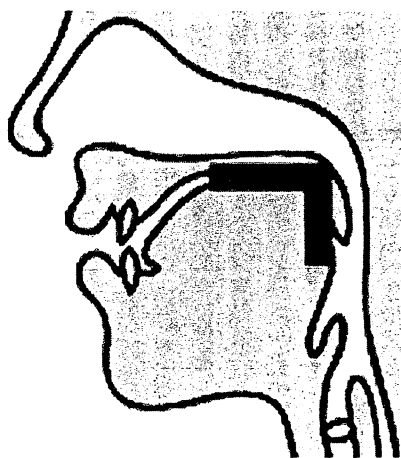


図4 kの形

音を解析する

——正音の四分法 (tetrachotomy)

そしてこうした子音字母、母音字母の組合せで音節を構成するシステムを作り上げる。/k/ + /a/ で /ka/、つまり「ト」で升となるように。朝鮮語は、日本語と違って、音節末にも /kan/、/kan/、/kat/……などといった具合に子音が立つ。そこで音節末の子音も組み合わせることにした。/kak/であれば「ㄱ」/kan/であれば「ㄴ」といった具合である。音節の頭の子音を初声、核となる母音を中声、音節末の子音を終声と

呼んで分類している。これはまさしく現代言語学の水準に限りなく近い。

学者たちの分析はこれに留まらなかった。日本語東京方言を見ると、ハシガ（低高低）Ⅱ端が、ハシガ（高高低）Ⅱ端が、ハシガ（低高高）Ⅱ端が、のごとく、音節の高低の位置で単語の意味を区別している。こうしたシステムを高低アクセントと呼ぶ。十五世紀の朝鮮語もまた、これに似た高低アクセントを有する言語であった。違いは、東京方言がどの音節から下がるかが重要なのに対し、十五世紀朝鮮語ではどこから上がるかがポイントだったことである。学者たちは音のこうした高低を、文字の左側に傍点（ぼうてん）を付すことによって表した。同じ「ka」という音節でも、低ければ平声（へいせい）と呼び、無点の外、高ければ去声（きょせい）と呼び、一点の外、音節内で低から高へと高さが移るものは上声（じやうせい）と呼んで、二点を付した。

これでわかるように、正音は音節を、初声、中声、終声、そしてアクセントという、四つの要素に解析する、現代言語学に肉迫する驚異的なシステムであった。当時の東アジア最先端の音韻学であった中国音韻学は、音節をいわば初声とそれ以外という二つの要素の分析する二分法にしか到達していなかったのである。

十五世紀の正音文献にはアクセントを表す傍点が、正確に付されている。木版印刷や活版印刷の書物のみならず、手書きの書にさえ、傍点は律儀に書かれた。そうした傍点は、時代が下るとともに乱れ始め、十七世紀ともなると姿を消す。

朝鮮語の中央語において音の高低で単語の意味を区別するシステムが失われたからである。なお、慶尚道や咸鏡道といった地方の方言では現在でも高低アクセントが存在する。

正音のゲシュタルト

——形が様式となるとき

正音は書物の形で現れ、すぐに手でも書かれることになった。十五世紀の正音文献はそう多くないが、正音を用いた文献は、近代以前の朝鮮王朝時代にも、書物だけでなく、手紙など、多くのものが残っている。ただ公的な文書は基本的に漢字漢文であったため、あたかもハングル文献は近代以前はほとんどなかったとの誤解が、後を絶たない。

正音のゲシュタルト（Gestalt、かたち）は正音以前の知識人たちが規範とする、中国の王羲之（三〇七—三六五？）の書の伝統をも破壊するゲシュタルトであった。『訓民正音』の書体は、そもそも筆で書けるようなかたちではなかった。明らかに意匠化されたゲシュタルトだったのである。正音はエクリチュール革命であったばかりでなく、書的美学をも覆えしかねない、〈ゲシュタルト革命〉でもあった。正音は繰り返し書かれ、繰り返し返されることによって様式を生んだ。王朝に栄えた〈宮体〉（きやうたい）と呼ばれる書体は、いわば〈宮体マニエリスム〉とも呼ぶべき様式として栄え、今日のハングル書芸にまで受け継がれている。

正音ゲシユタルト革命をめぐる問題、そして正音エクリチュール革命における、正音革命派と守旧派原理主義との王朝の〈知〉をめぐるドラマは、野間秀樹(二〇〇七a)など別稿に譲らざるを得ない。今日、正音エクリチュール革命は、正音の創製を身を賭して諫めた守旧派原理主義の筆頭にして他ならぬ集賢殿の指導者の一人であった、崔萬理(さいばんり/チュエ・マルリ。一四〇〇—一四四五?)¹⁾らが慄いたとおり、ハングル・エクリチュールの圧倒的な制圧という形を呈している。おそらくこの事態は、世宗の夢をも、あるいは超えているのかもしれない。

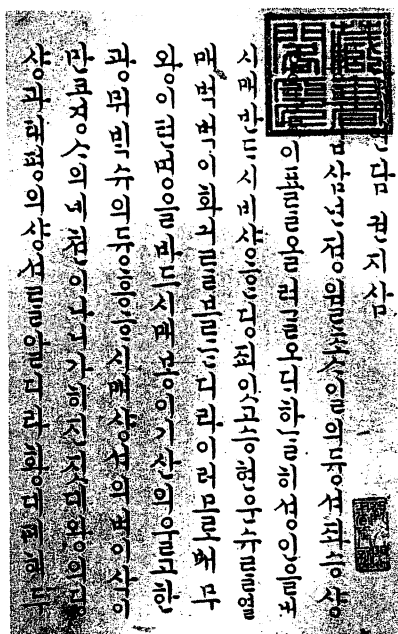


図4 「南溪演談」：朝鮮中期の宮体

参考文献

小倉進平著・河野六郎補注(一九六四)『増訂補注 朝鮮語

学史』刀江書院

* 朝鮮語に関する研究史、文献史。図版も多い。

亀井孝・河野六郎・千野栄一編著(一九八八—一九九六)

『言語学大辞典 第一巻—第六巻』、東京…三省堂

* 言語と文字を考える世界最高峰の辞典。河野六郎

(一九二—一九九八)は言語学、朝鮮語学の泰斗。

姜信沆(一九九三)『ハングルの成立と歴史』大修館書店

* ハングルの歴史については必読の一冊。多くの資料

に触れることができる。

河野六郎(一九八〇)『河野六郎著作集第三巻』平凡社

* 日本を代表する言語学者の著作集。専門書。

河野六郎(一九九四)『文字論』三省堂

* 文字とは何かを考える必読書。

志部昭平(一九九〇)『諺解三綱行実図研究』全二巻。汲

古書院

* 民衆を教化するための朝鮮王朝時代の書物『三綱行

実』の諺解を、文献学的、言語学的に考察した研究

書。

趙義成(二〇〇八)『訓民正音』からの接近』野間秀樹編

著(二〇〇八)所収

* 『訓民正音』を学問的な立場からわかりやすく説

く。まずこれから。

中村完（一九九五）『論文選集 訓民正音の世界』創栄出版

*『訓民正音』と朝鮮語にかかわる論文選集。

野間秀樹（一九九〇、一九九一）「朝鮮語のオノマトペ」

『学習院大学言語共同研究所紀要』第一三三号、第一四号、
学習院大学言語共同研究所。左記サイトで閲覧可能：
<http://www.tufs.ac.jp/ts/personal/nomahideki/index.shtml>

index.shtml

野間秀樹（二〇〇一）「オノマトペと音象徴」「湖がパンチ
ャクパンチャク輝いた——朝鮮語のオノマトペ——」

『月刊言語』八月号。第三〇巻、第九号。大修館書店

野間秀樹（二〇〇七a）「試論：ことばを学ぶ根拠はどこ
に在るのか」野間秀樹編著（二〇〇七）所収

* 朝鮮語に限らず、いわゆる「国語」「外国語」など、
広く「ことばを学ぶ根拠は」という問いを問う五十
ページの論考。外国語教育に関心のある方にも読ん
でいただけると嬉しい。初めて「正音エクリチュ
ル革命」という形で位置づける。朝鮮語を知らなく
とも読める。

野間秀樹（二〇〇七b）「音声学からの接近」野間秀樹編
著（二〇〇七）所収

野間秀樹（二〇〇七c）「音韻論からの接近」野間秀樹編
著（二〇〇七）所収

野間秀樹（二〇〇七d）「形態音韻論からの接近」野間秀
樹編著（二〇〇七）所収

* 音論をめぐるこの三篇で朝鮮語の音のありようの面
白さを味わう。

野間秀樹（二〇〇七e）『新・至福の朝鮮語』朝日出版社

* 朝鮮語の入門はこれで。CDは韓国ソウルで現地の
声優が録音。ちよつとしたドラマ風。語彙集を兼ね
た索引、韓国の姓一覧、日本語と朝鮮語の漢字音対
照表なども付す。

野間秀樹（二〇〇八a）「言語存在論試考序説Ⅱ」野間
秀樹編著（二〇〇八）所収

* 「言語はいかに在るか」という問いを論ずる。音と
意味、〈ことばが意味となる〉、〈話されたことば〉
と〈書かれたことば〉、〈文〉の枠、〈言語場〉論
といった問題を扱う。言語学と言語哲学にまたがる
ような問題も。本稿の原理論でもある。

野間秀樹（二〇〇八b）「音と意味の間に」『國文學』一〇
月号、第五三卷一四号、學燈社

* 言語音と意味の問題。朝鮮語のオノマトペも素材
に。

野間秀樹編著（二〇〇七）『韓国語教育論講座第一巻』く
ろしお出版

* 韓国語教育の歴史と現在、南北の言語と方言、音
論、文字と発音、韓国語のローマ字表記、外来語表
記、漢字音教育法、語彙論、造語論など。日本語と
韓国語の対照言語学的な視点からの記述が随所にち

ぺりかん社

名作20選の「あらすじと解説」で読む！
韓国の古典小説

染谷智幸・鄭炳説編 日韓の文学研究者による座談会、代表的な20作品の「あらすじと解説」、エッセイ、テーマ論考などから韓国の古典小説の世界に触れる入門書。韓流ブーム以降、韓国文化への関心の広がりに応える待望の一冊。 3360円

激動期の美術

幕末・明治の画家たち [続]
辻 惟雄 編著 菊池容斎、柴田是真、月岡芳年、小林清親など、江戸から明治へと移り変わる激動の時代に、伝統と革新のはざままで苦闘した画家たちの生涯を活写。 3990円

幕末・明治の画家たち

文明開化のはざまに [新装版]
辻 惟雄 編著 河鍋晩斎、狩野芳崖、高橋由一他。 3990円

江戸文学 39

[特集] 史料からみる文芸、史料としての文芸

鈴木俊幸監修 高橋章則／杉仁／岩坪充雄／永井一彰／蔵本朋依／岩橋清美／山本英二／佐藤宏之／工藤航平／磯部敦／若尾政希。 2100円

東京都文京区本郷1-28-36
☎03-3814-8515 *税込価格
http://www.perikansha.co.jp/

野間秀樹・金珍娥 (二〇〇七) 『ニューエクスプレス韓国

典としても使える。
ほとんどの関連文献にたどりつけるだろう。全八百十七ページ。百ページを超す詳細な索引は小百科事

りばめられているので、日本語や日本語教育に関心のある読者も楽しめる。本書の書評を上記の筆者のサイトで読むことができる。全七百二十七ページ。
野間秀樹編著 (二〇〇八) 『韓国語教育論講座第四巻』くろしお出版

* 韓国語圏の文学、映画、マンガ、インターネット、

飲食、歴史学、文典史、辞書史などへの入門書。ハ

ングルが読めなくても楽しめる。古代朝鮮語から現

代朝鮮語までの文献案内、朝鮮文学や一般音声学、

一般言語学のブックガイドを含む。これ一冊でまず

ほとんどの関連文献にたどりつけるだろう。全八百

十七ページ。百ページを超す詳細な索引は小百科事

典としても使える。

語』白水社

* 韓国語への易しい入門はこれで。実際に使える表現で学ぶ。CDもドラマ風。

朴永濬他 (二〇〇七) 『ハングルの歴史』中西恭子訳。白

水社

* 正音以前から現代までの朝鮮半島の文字とハングル普及の歴史を読み物風に説く。

李基文 (一九七五) 『韓国語の歴史』藤本幸夫訳。大修館

書店

* 朝鮮語の歴史を概観する古典ともいうべき一冊。やや専門的。

—— 東京外国語大学大学院教授 ——

特集 流人の文学

若宮丸漂流民とは	大島幹雄
島という空間	菅田正昭
現代文学における故郷喪失の意味	和田茂俊
貴種流離譚とは	山岡敬和
隠岐紀行	山田章
「流人と呼ばれた人たち」	三宅晶子
世阿弥	立花靖弘
役行者	藁谷隆純
伴大納言	溝部仁
親鸞	呉羽長
小野篁	中尾堯
日蓮	平田英夫
後鳥羽院	

臨時増刊号 白・白・白 — 白は色ではない、抵抗である 1月28日発売 1785円
詳しくは131頁

國文學 一解釈と教材の研究一

平成21年2月号

平成二十一年二月十日発行
編集人 大島圭一郎
発行人 佐中雅徳
印刷所 大日本印刷株式会社
発行所 株式會社學燈社
東京都新宿区西早稲田三十一一〇
〒169-8608
振替口座 〇〇一四〇一三六二五三
電話 五三三八七五八(編集)
五三三八七五四(営業)
五三三八七二六(編集)
FAX 五三三八七二六(編集)
五三三八七二五(営業)

編集後記
◇東京から飛行機でわずか二時間、九州から
なら一時間ほどで辿りついてしまっ
も近い外国、それが韓国です。しかも、こ
なに近いにも関わらず、私たちは意外にもこ
の国のことをあまり知りません。ハングルとは
◇例えば、韓国で使われているものなのか。また
どのようにして生れてきたものなのか。また
葉は同じなのか。
◇言葉に限ったことではありません。いま韓
国で読まれている文学は何か。韓国でのお葬
式はどのように行なわれるのか。キムチはど
のように発達してきたのか。韓国映画の魅
力、アリのランの実態などなど。考えれば考え
るほど「韓国」という国を知らないことに気
づかされます。こんなに近くて、多くの文化
を共有している国なのに、です。
◇今回の特集は、よくある「韓国案内」では
ありません。韓国ブームについても触れてい
ません。ですが、代わりに「韓国」を知るため
の種や知識が相当に詰まっています。これら
で誰も教えてくれなかった「韓国」の姿がこ
こにあります。
◇今回は、流人たちの文学の特集します。貴
種流離や故郷喪失などのモチーフをはじめ、
日本の文学世界を築き上げてきた流人たちの
姿にご注目ください。(大島)

編集協力：牧野十寸穂